



京都大学フィールド科学教育研究センター
Field Science Education and Research Center
Kyoto University

はじめに

現在、京都大学フィールド科学教育研究センター『木文化プロジェクト』では、京都府由良川流域と高知県仁淀川流域の二つの流域を対象として研究活動を行っています。プロジェクトは、健全な森づくりが下流環境の改善に貢献することを科学的に実証するとともに、林業の活性化に貢献する仕組み作りを模索しています。その際、今後どのような森づくりを行っていけばよいのかを、実際に山林を所有なさっている皆様におたずねする必要がありますと考えました。そこで両流域の最上流部に位置する京都府美山町と高知県仁淀川町にて、これからの山づくりに最も近い立場にいらっしゃる皆様を対象とするアンケートを企画いたしました。

対象

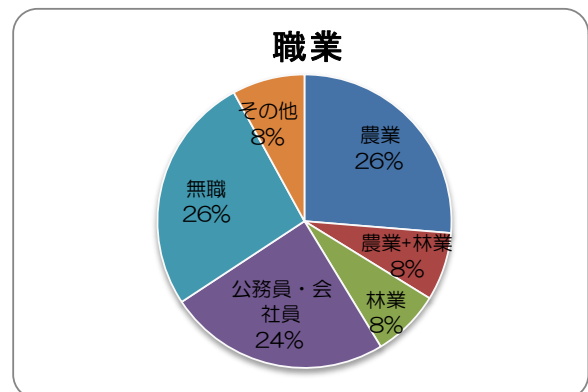
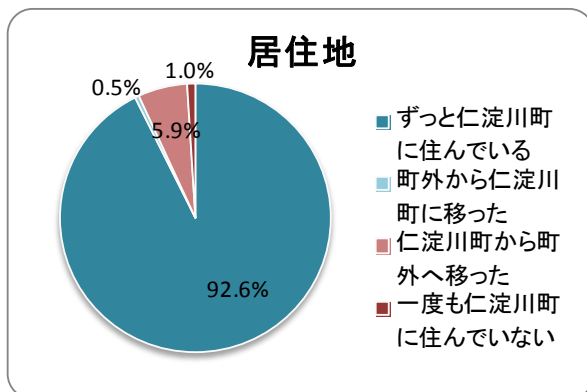
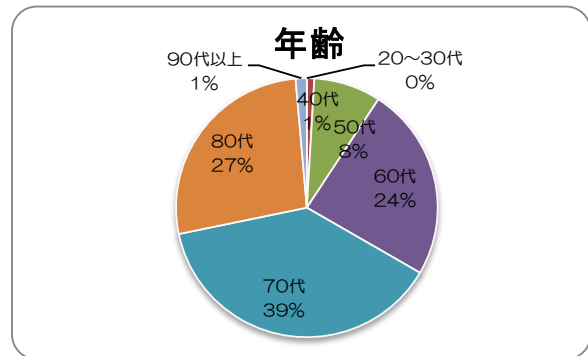
仁淀川森林組合のご協力を得て、2012年10月に組合員の方々 625名を対象に「仁淀川町の森とくらしに関するアンケート」を実施させていただきました。

その結果、236名の方からご回答をいただくことができました。お忙しい中ご協力いただきました方々には深く御礼申し上げます。ただいま集計と詳細な分析を行っている最中ですが、速報版として結果の一部をご紹介します。(*なお、数値は速報値のため今後修正される可能性がございます。)

ご回答いただいた方々について

ご回答いただいた方の約9割が60代以上で男性でした。ずっと仁淀川町にお住まいの方がほとんどでしたが、仁淀川町から町外へ移った、あるいは一度も仁淀川町に住んだことがないという方が合わせて約7%いらっしゃり、こういった方々は遠方からの森林管理を余儀なくされているようです。

職業別では、お仕事として農業をなさっている方が林業との兼業者もあわせると回答者全体の34%、林業をなさっている方は農業の兼業者とあわせて16%でした。



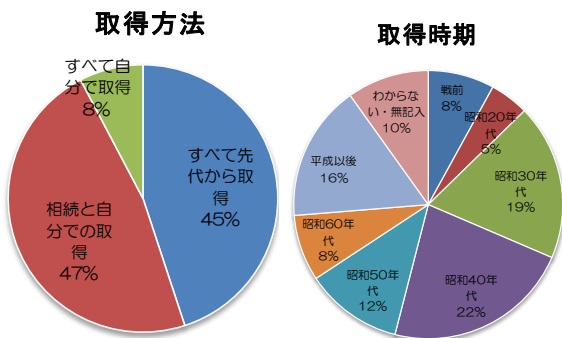
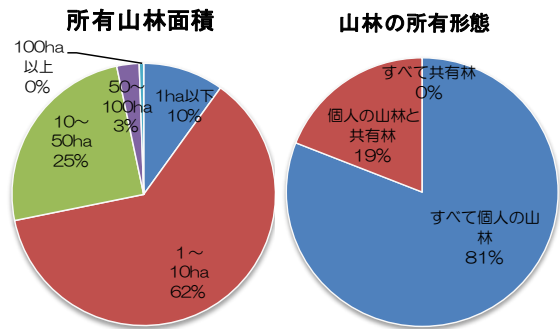
アンケート結果

1. 所有山林の現状

「所有山林に関する質問」より

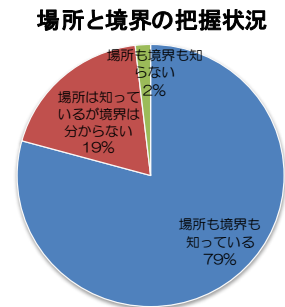
山林面積： 10ha以下の小規模山林を所有される方が7割以上でした。所有形態は、約8割が「すべて個人の山林」とお答えで、共有林をお持ちの方は2割程度でした。

植栽の様子： スギとヒノキを植えていらっしゃる方が、ともに9割以上いらっしゃいました。それらを中心に、広葉樹と一部マツを合わせて植栽されているようです。その他の樹種として、クヌギ、ケヤキ、タケ、シナアブラギリなどがあげられていました。

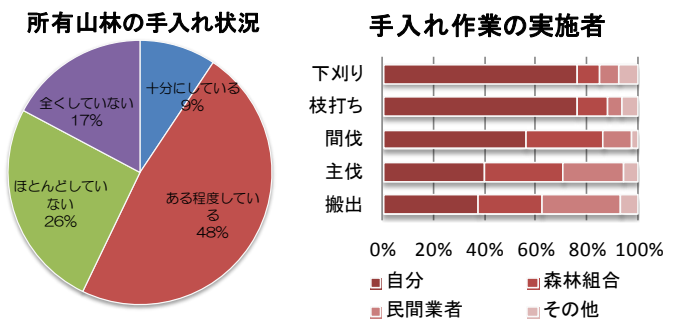


取得方法： すべて先代からの相続によって取得なさった方は5割程度にとどまり、相続以外にご自身でも新たに取得なさった方が半数以上いらっしゃいました。またその取得時期は、戦前よりも戦後が多く、特に昭和30年代から昭和40年代にかけてピークだったようです。

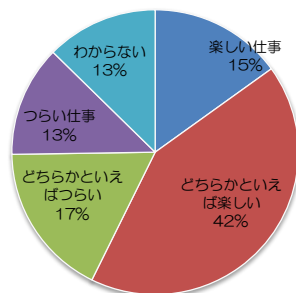
境界の把握： 所有山林の境界について、ほとんどの方はご存知でしたが、約2割の方は境界が分からないとお答えでした。



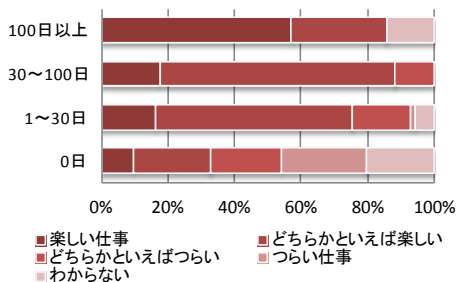
管理状況： 山林の管理状況に関しては、過半数の方がある程度の管理ができていたとの回答でした。主に下刈り、枝打ちなど軽度の手入れはご自身で行われており、伐採や搬出など費用と労力のかかる作業は森林組合や委託業者に任せる割合が増えるようでした。ただし、依然としてご自身で伐採・搬出作業を行っていらっしゃる方も多く、今後ご自身あるいはご家族を中心に周囲のサポートを受けられるような管理体制を望まれているようでした。



所有林の手入れに対するイメージ



活動日数と手入れのイメージ

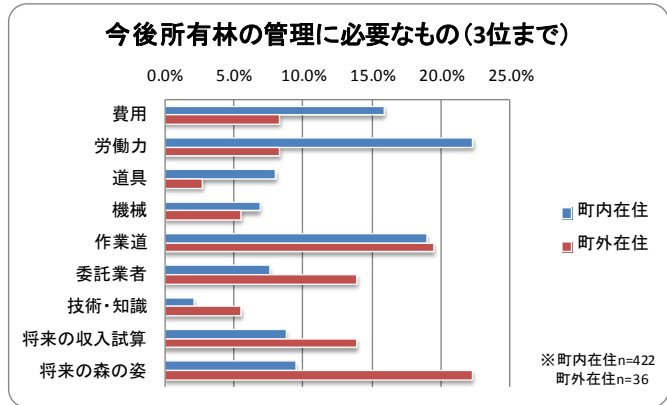


森林の手入れのイメージ： 半数以上の方が森林の手入れを「楽しい仕事」と捉えていらっしゃいました。特に、年間に一度でも山林で活動なさった経験のある方はそのように感じていらっしゃるようです。逆に、全く活動されていない方は、「つらい仕事」あるいは「わからない」とお答えの方が多くなりました。

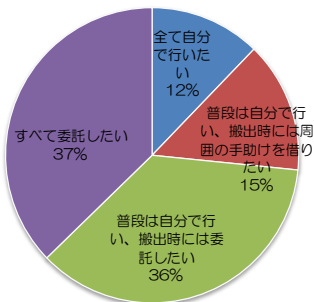
2. これからの山づくり

「今後の所有林管理に関する質問」より

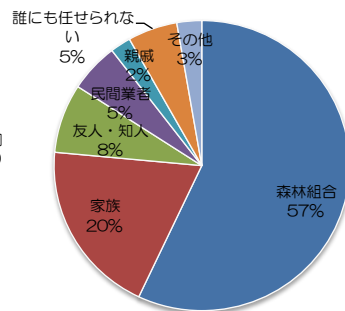
今後の管理に必要なもの： 今後、ご自身の所有林の管理に必要なものをおたずねしたところ、仁淀川町にお住まいの方は1位「労働力」、2位「作業道」、3位「費用」となりました。一方、町外にお住まいの方では、1位「将来の森の姿」、2位「作業道」、3位「委託業者」「将来の収入試算」となりました。どちらにお住まいの方も、管理を進めるためには作業道の開設が欠かせないと考えていらっしゃるようでした。町内の方はある程度までご自身で管理出来る体制づくりを、町外の方は将来の森の姿や収入に関する十分な見通しを得つつ実際の作業は委託するような管理体制を、それぞれイメージされている様子でした。



今後の森林管理の方法



今後森林管理を任せてもよい相手

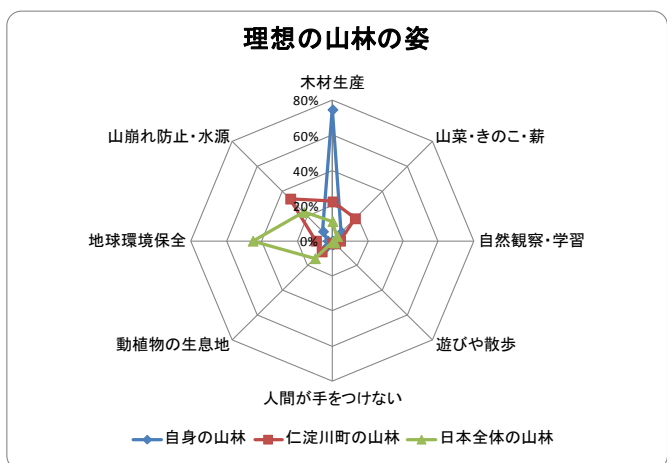


管理の方法： 今後も何らかの形でご自身が森林管理に関わりたいと考えていらっしゃる方が約6割いらっしゃいました。家族や身近な人に管理を引き継ぎ、必要に応じて周囲の方々あるいは森林組合・民間業者等の力を借りて管理を続けたいとお考えのようでした。一方で、今後は管理を全て委託でとお考えの方も4割程度おられ、それらの方は委託先の候補として、7割が森林組合を1割が民間業者をあげていらっしゃいました。

理想の山林の使い方： 山林には様々な利用の方法があります。例えば、木材生産や山菜・きのこ・薪採りなどは、森の恵みを直接利用する点で価値があるといえます。また、地球環境保全や動植物の生息地などは、直接人間が森の恵みを受けるわけではありませんが、森の存在そのものに価値があるといえるでしょう。

「あなたにとっての理想の山林とはどのような山林ですか」と、「ご自身の山林」、「仁淀川町の山林」、「日本全体の山林」のそれぞれについておたずねしたところ、3つの森には期待される姿がやや異なっていることが分かりました。

右上のグラフからは、「ご自身の山林（私有の森）」では、前者の利用価値が理想とされ、「日本全体の森林（公共の森）」では後者の非利用価値（存在価値）が理想とされていると言えそうです。また、仁淀川町の森は他の2つと比較すると、山崩れ防止・水源地としての役割や、山菜・きのこ・薪などの調達の間、自然観察・学習、遊びや散歩などの場として直接あるいは間接的に幅広く活用することがのぞましいと考えられているようでした。今後の森づくりのヒントになるでしょう。

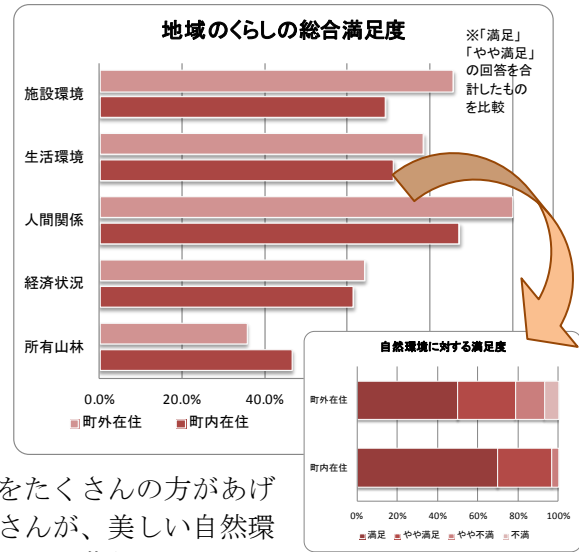


3. 地域の暮らし満足度

「くらしの満足度に関する質問」より

町内在住者と町外在住者で地域のくらしに対する満足度を比較しましたが、どちらにお住まいの方もおよそ現状のくらしに満足されている様子でした。ただし、仁淀川町内にお住まいの方は、医療施設の充実度や日用品の調達の面で満足度がやや低くなっているようでしたが、それ以外の面ではほとんど差がありませんでした。

しかし、「生活環境」の中の「自然環境」に対する満足度では、町内にお住まいの方の満足度が町外にお住まいの方の満足度を上回っていました。また、「今後なくなって欲しくないもの」として、神楽、秋葉まつり、和紙づくりなどの伝統、地域のつながりや助け合いの関係、また集落や住民そのものなどをたくさんの方があげられていらっしゃいました。仁淀川町にお住まいの皆さんが、美しい自然環境とそこに息づいてきた伝統を誇りに思い、それらと共に暮らしてきた町と人々をなんとかして今後も守り続けたいとお考えであることがうかがえました。



おわりに

今回のアンケート調査で、仁淀川町に森林をお持ちの皆さんが、各集落と周辺の森林の将来に大変な危機感を抱いていらっしゃる事が分かりました。たとえば、「高齢のためどんなに山が好きでも個人レベルではどうにもならない」、「生態系が崩れ里山にも住めなくなるのでは」など、将来に対する不安の声があがっていました。しかしその一方で、「今のうちに指導者や費用を確保して地域の若者に技術を授けられないか」というご意見や「地域全体での山林管理の在り方をさらに検討すべき」、「他の所有者の意見も聞きたい」というお声もいただきました。

また、「(アンケートの) 集約した資料が今後少しでも過疎高齢地を勇気づけるものになれば」とのご意見や「現地の本音をもっと聞きに来てほしい」等々、幾多の叱咤激励のお言葉もいただきました。お答えいただいた方々にはご高齢の方が非常に多く、内容に分かりにくい点多々あったことと思われ大変反省しています。しかし、こうして多くの方々からお返事をいただいたのは、皆さんが本当にこれからの町づくりを真剣に考えていらっしゃるからに他ならず、プロジェクトメンバー一同、益々頑張らなければという気持ちでいます。今後も木文化プロジェクトは、皆さんのご意見をお伺いしながら研究をすすめていく所存です。



「木文化プロジェクト」とは？

— 「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業」 文部科学省概算要求事業 2009 - 2013

日本の自然環境は、常に人間活動によってその姿を改変されてきました。森林もその例外ではありません。しかし、現在国土の27% (約1000万ha) を占める人工林のうち、65%は管理不足による荒廃が進んでいます。その結果、土砂災害などの自然災害、あるいは生態系バランスの崩壊、さらには農山村の荒廃を引き起こす要因の一つともなっています。

木文化プロジェクトは、疲弊した森林を適切に管理し直し、本来の森・川・里・海の繋がりを再生することで、先人達の残した大切な森を守り、自然環境と共生する「地域循環木文化社会」の創生を目指す、学術的な研究プロジェクトです。その基礎とするのは、京都大学が提唱する「森里海連環学」の思想です。

【※「森里海連環学(もりさとうみれんかんがく)」は、京都大学フィールド科学教育センター(2003年4月発足)が提唱する新たな学問領域の名称です。森から海までを一つの繋がり(連環)の中で捉え、その仕組みを解明し、持続的で健全な国土環境を保全・再生するための具体的な方策の提案を目指します。】

- ◆ 統括責任者：柴田昌三 (京都大学フィールド科学教育研究センター、センター長・教授)
- ◆ サブリーダー：【由良川プロジェクト】吉岡崇仁 (同上、教授) 【仁淀川プロジェクト】長谷川尚史 (同上、准教授)
- ◆ 構成主体：京都大学フィールド科学教育研究センター
連携融合先：京都府、高知県、舞鶴市、高知市、仁淀川町
- ◆ お問合せ
京都大学フィールド科学教育研究センター 森里海連環学プロジェクト支援室
〒606-8502 京都府京都市左京区北白川追分町
電話 075-753-6434 FAX 075-753-6451
メール proshien@kais.kyoto-u.ac.jp
ホームページ <http://fserc.kyoto-u.ac.jp/proshien/kibunka/index.html/>

